

5

図書館を通じた途上国への支援

～ケニア国の日本・ケニア友好ソンドウ・ミリウ公共図書館～



迫田 至誠
SAKODA Shisei

日本工営株式会社 / コンサルタント海外事業本部
安全衛生管理室 / 室長

ケニアで水力発電所の建設に関わる建設コンサルタント技術者が、「地元コミュニティに長期的な貢献を」との思いから図書館の運営を地元婦人会に提案し、2001年にソンドウ・ミリウ公共図書館が開設された。その図書館の開設、運営、支援について紹介する。

ケニアはどんな国

1963年に英国から独立したケニア共和国はアフリカの東部に位置し、面積は58.3万km²（日本の約1.5倍）、人口は4,725万人（2016年日本の約1/3）で、キクユ族、ルオー族、マサイ族等からなる多民族国家である。一人当たりGNI（国民総所得）は1,290米ドル（2014年日本の約1/30）、経済成長率5.6%（2015年）、失業率9.2%（2014年）の開発途上国である。¹⁾（図1）

国土は中央部の大地溝帯沿いの高原やケニア山岳地帯、北部の砂漠地帯、東部の海岸地帯、西部のビクトリア湖畔地帯など起伏に富んだ地形である。労働人口の約60%がコーヒー、茶、園芸作物などの生産に関わる農業国である。

教育制度は8・4・4年制で小学校8年（6～14歳）、中

学校4年、大学4年である。小学校は義務教育で進学率は中学校48%（2013年）、大学31%（2013年）である。²⁾

日本はケニアへ1963年から電力、農業、水道、衛生、健康、医療、教育、環境保全など幅広い分野に政府開発援助（ODA）を行っている。

ソンドウ・ミリウ水力発電所建設事業

ケニアの深刻な電力不足解決のため、1985年に国際協力機構（JICA）はケニア西部のニヤカチ地区に建設するソンドウ・ミリウ水力発電所のフィージビリティ・スタディ（実行可能性調査）を実施した。引き続き日本の有償資金協力で1991年に詳細設計、1999年から建設工事を行い2008年に発電所は完成した。また、当発電所放水路末端のサンゴロ水力発電所が2012年に完成

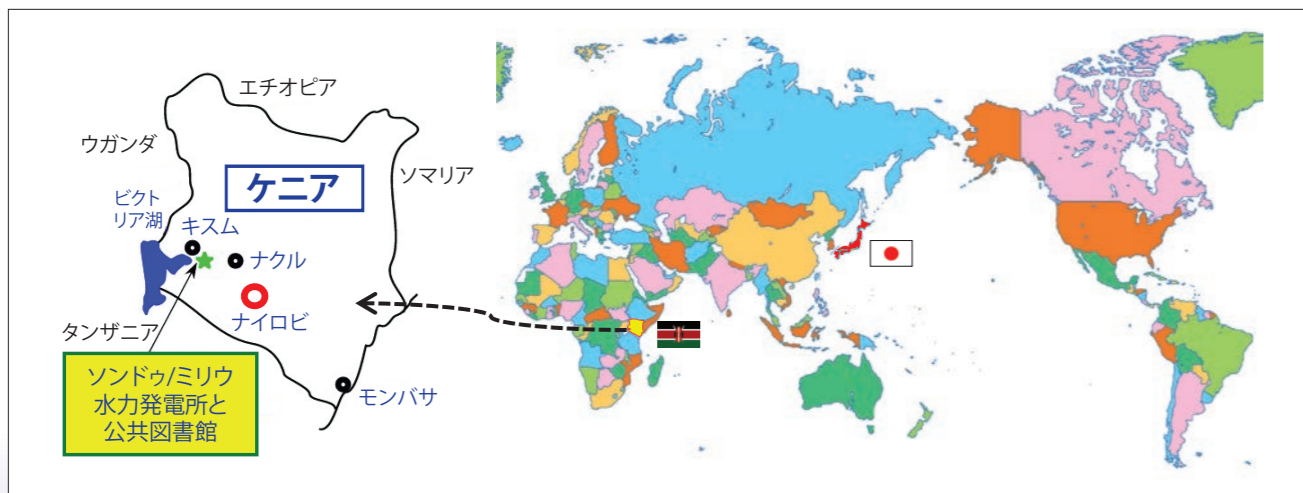


図1 ケニアのソンドウ・ミリウ水力発電所と公共図書館の位置図



写真1 建設中の取水堰

写真2 水圧鉄管路とニヤカチ地区

写真3 ソンドウ・ミリウ発電所

した。

弊社は1985年から28年間に渡り、計画、調査、設計、施工監理まで一貫したコンサルタント業務に従事した。

当事業はソンドウ川の流水を取水し、長さ6.2kmと1.2kmのトンネルと鉄管路で発電所に導水し、長さ4.7kmの放水路でソンドウ川に戻す最大出力60MWの発電所を建設する事業である。また、追加事業で最大出力21MWのサンゴロ水力発電所を建設した。（写真1～3）

本事業は幾多の困難を乗り越え完成し、ケニアに大きく貢献していることが高く評価され、海外において日本企業が携わった優れたプロジェクトを表彰する国交省の「JAPAN プロジェクト国際賞」を2009年に受賞した。

図書館開設の経緯

私は、1997年から2004年にかけて、当事業の現場所長として現場に駐在し施工監理を行った。

現地では仕事が少なく貧しい生活を送る人々の「発電所の建設が始まれば就職の機会も増え、生活が良くなる」という強い期待があった。だが、工事で労働者として雇えるのは希望者をはるかに下回る2,000人が限度であり、これに一部の住民が不満を訴え、さらに工事での環境問題も取りざたされ、事業が滞ることがあった。

そのため、住民代表やNGO、行政官、有識者、議員からなる技術委員会が設置され、私も直接の担当者として参加した。同会が問題の調査と分析、解決策の提案を行い、関係者が一体となり雇用や環境の問題解決に取り組み、徐々に住民の理解と協力が得られ、事業が円滑に進められるようになった。

私は大規模なインフラの建設事業だからこそ、地域住民との対話や信頼関係が欠かせない、事業の恩恵が住民にきちんと届き、発電所が住民と共存できる関係

を作らなくては行けないと強く感じていた。そんな折の2000年末、現地のヘラ婦人会から「地元コミュニティのために何か支援して欲しい」と相談があった。

発電所が建設されるニヤカチ地区はケニアで最も貧しい地域の一つであり、ルオー族が農業と漁業で生活している。しかし教育には熱心で、親は無理をしても子供を学校へ通わせていた。

当時現地の小学校では政府の教科書の無料配布が数人に一冊しかなく、授業で使用した後、先生が教室の棚に鍵付きで保管していた。生徒は学校で先生が黒板に書いたことを書き写したノートで勉強するしかなく、日本の小学校では考えられない教育環境に驚き、また同情していた。

私は小学校の時、図書館で本を読み未知の世界を知ったことや将来の夢を描いたことを思い出し、現地の子供達にもそのような機会を与えたいと思い、教科書や本を自由に読める図書館の開設をヘラ婦人会へ提案した。

ソンドウ・ミリウ公共図書館の開設

2001年6月、ケニア発電会社の工事用の建物の一室を間借りして、弊社の社員や現地の技術者から開設資金と英語の本を、施工業者の鴻池組から机や椅子を提供してもらい「ソンドウ・ミリウ公共図書館」が発足した。³⁾

当時11歳の生徒は「図書館には興味深い本がたくさんあり、管理の婦人が『終了ですよ』と言うまで、時間を忘れて本を読んでいた」と、14歳の生徒は「私は図書館から6kmくらい離れた所に住んでいますが、一冊の教科書も持っていないのでたいへん役に立ちます」との感想を書いている。

工事が終了し、ケニア発電会社の建物が利用できなくなったため、2004年10月に「図書館を応援する会」と大阪府高槻市の「弥生が丘いきいきクラブ」からの支援



写真4 ソンドウ・ミリウ公共図書館の全景



写真5 ヘラ婦人会と応援する会 (10周年記念)

金で、土地を購入して新たに図書館を建設した。(写真4)

図書館の運営

図書館はヘラ婦人会が運営し、図書館活動に必要な資金は図書館を応援する会が支援している。(写真5)

当初図書館の開閉や来館者の登録などを婦人会の会員が交代で行っていたが、2004年の図書館建設後、建物が大きくなったことや蔵書が増えたことから、司書と警備兼雑務員を雇用し、図書館を運営している。

2001年に194冊で始まった図書館の蔵書は、2008年には4,800冊に達したが、2009年3月の暴風雨で半減した。その後5,580冊にまで増加している。(図2)

図書館は原則平日が9～18時まで、日曜が9～14時まで開館している。入館者は入館記録帳に入出時刻、氏名、所属、利用図書等を記録する(写真6、7)。年間利用者数は開館翌年が11,000人、他の年が5,100～8,200人で、平均6,500人である(図3)。最近5年間の利用者の年齢は、14歳以下の小学生が44%、15歳以上の学生・大人が56%である。来館者数が多いのは学校が休みの8月と12月である。

図書館では毎年作文コンテストや図画教室を開催し、子供達の能力開発を支

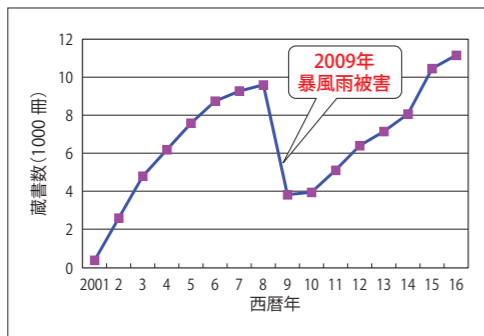


図2 図書館の蔵書数

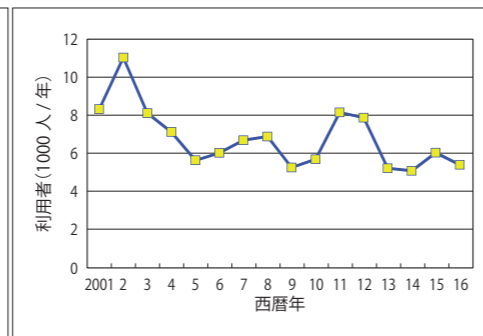


図3 図書館の利用者数

援している。また臨時に折り紙教室、民話本作り、英語綴り方教室、理科実験教室、近隣の小学校での読書教室を開催し、日本文化の紹介や読書文化の啓蒙などに挑戦している。(写真8、9)

2016年の15周年記念冊子に、14歳の生徒は「本を読むことでいろいろな社会を知ることが出来るようになった」と、16歳の学生は「休日に宿題を終わらせるのに必要なたくさんの本があり、図書館から多くの利益を得ています」などの感想を寄せている。

婦人会は寄付に頼るだけでなく、運営費用を自力で稼ぐため、養蜂、養鶏、酪農、コピー、インターネット、携帯



写真6 図書館の本棚と読書する小学生達



写真7 図書館で勉強する学生達

電話充電、タイプサービスなどの事業を試してはいるが、有力な収入源が見つからない状況である。

図書館を応援する会

2003年、外務省の「ODA民間モニター」として現地を訪問された小西守氏(応援する会前副会長)が図書館活動に強く賛同され、帰国後「弥生が丘いきいきクラブ」に働きかけ、バザーの収益金や本の寄付、地元小学校とケニアの子供との図画交換会など、市民レベルで長く支援されている。

そして、図書館の運営を現地で直接支援してきた私は2004年の帰国後、「図書館を応援する会」(私が会長)を作り、婦人会を資金面や運営面で支援している。現在応援する会の会員約50人は、「この図書館へ思い入れがある」とか、「図書館そのものが好きで何かしたい」という思いのあるケニア、日本、英国などいろいろな国の人達である。弊社もこの図書館支援活動に賛同し、ナイロビ事務所や本社が積極的に支援している。

2009年3月の暴風雨で図書館が大打撃を受けた際、応援する会と弊社の126名の社員から義援金が集まり、5月には図書館を再開でき、たくさんの方が図書館を愛する心を持っているのだと感激した。

応援する会では資金だけでなく、社内で集めた英語の本や購入した日本や世界の名作を現地に寄付している。最近ケニアでは開館当時現地の中学生だった青年達が、この図書館へ本を贈るキャンペーンを開始している。(写真10)



写真8 作文コンテストの表彰式



写真9 図画教室

応援する会では婦人会から毎月提出される活動報告や写真をブログに載せ、会員に活動状況を報告している。⁴⁾

この図書館への支援活動は、企業の芸術文化支援活動の活性化を目的とする「企業メセナ協議会」からメセナ(芸術・文化振興による豊かな社会創造)活動として高く評価され、メセナアワード2014「ケニアで読みま賞」として表彰された。(写真11)

図書館のこれから

図書館の運営にはいくつかの課題があり、特に婦人会と応援する会の会員の世代交代が課題であるが、最近、若い世代の図書館活動への参加があり、明るい兆しが見え始めている。

日本が支援して建設した水力発電所が50年100年と運転され続けるように、図書館が子供達に愛され存続するように今後も支援したい。

<参考文献>

- 1) 「ケニア共和国基礎データ」平成28年8月22日 外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/kenya/data.html>
- 2) 「外国・地域の学校情報」平成27年11月 外務省 http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/07africa/infoC71400.html
- 3) 「図書館ウェブサイト」 http://www.shisei.com/lbry-1/lbry-1_001.htm
- 4) 「図書館ブログ」 <http://plaza.rakuten.co.jp/sondulibrary/diary/>



写真10 新しい本を早速読みだす子供達



写真11 メセナアワード2014「ケニアで読みま賞」受賞